

〔8月4日締切課題〕 作品に「学年」と自分の「氏名」を本人が書く。
(幼・小1の方は、学年を書かなくてもよい。)

小学2年参考手本

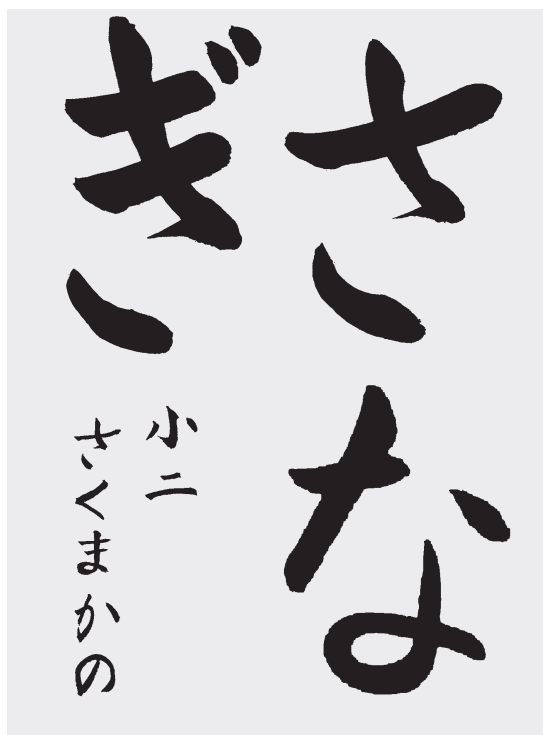


種谷萬城先生

幼・小学1年参考手本



小池蹊舟先生



柳橋香仙先生



橋本玉扇先生

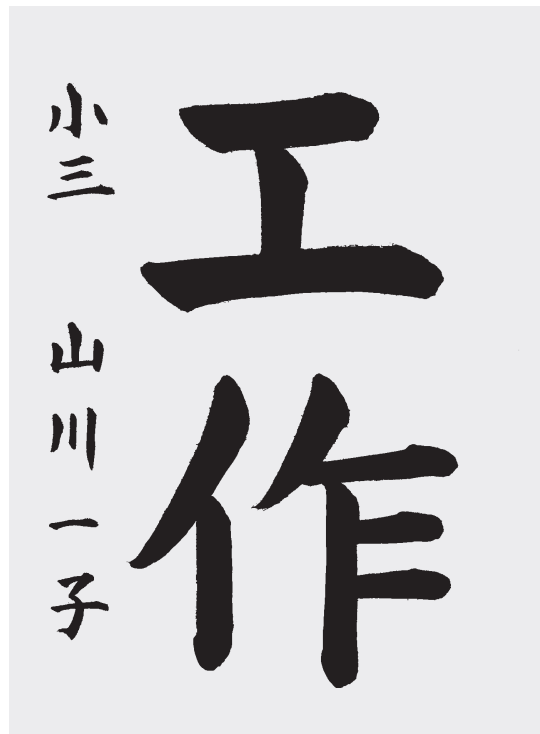
〔8月4日締切課題〕 作品に「学年」と自分の「氏名」を本人が書く。

小学4年参考手本



千葉蒼玄先生

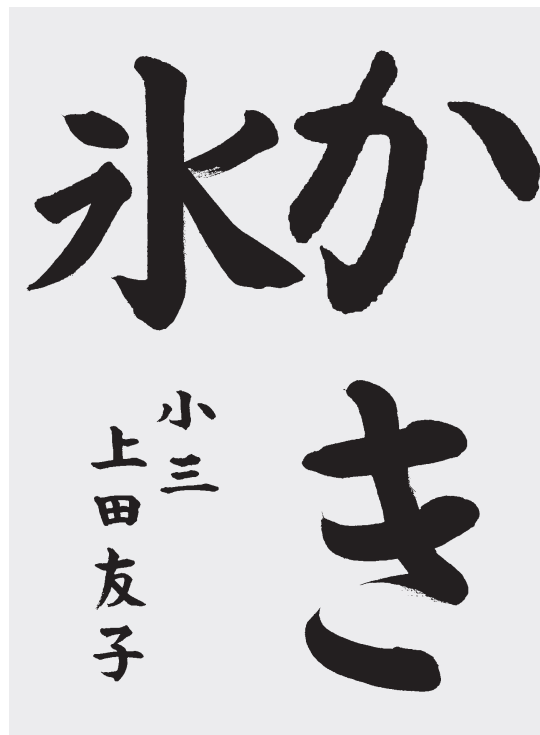
小学3年参考手本



田村鄭雲先生



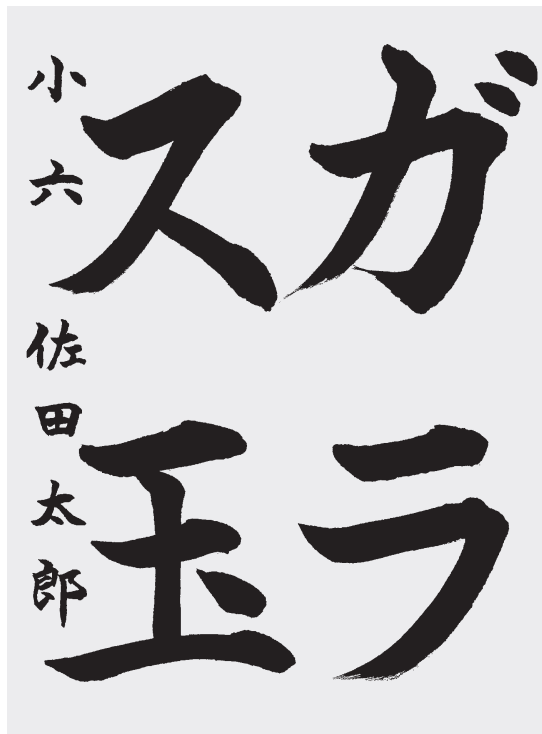
川島舟錦先生



武山櫻子先生

〔8月4日締切課題〕 作品に「学年」と自分の「氏名」を本人が書く。

小学6年参考手本

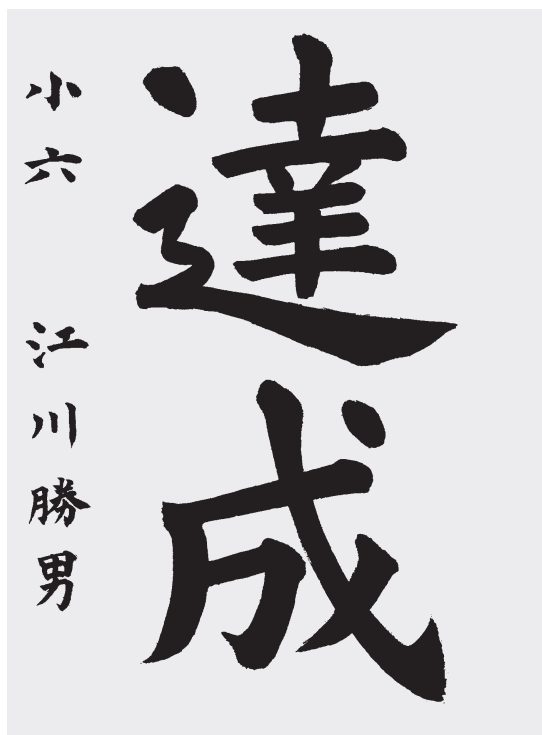


後藤大峰先生

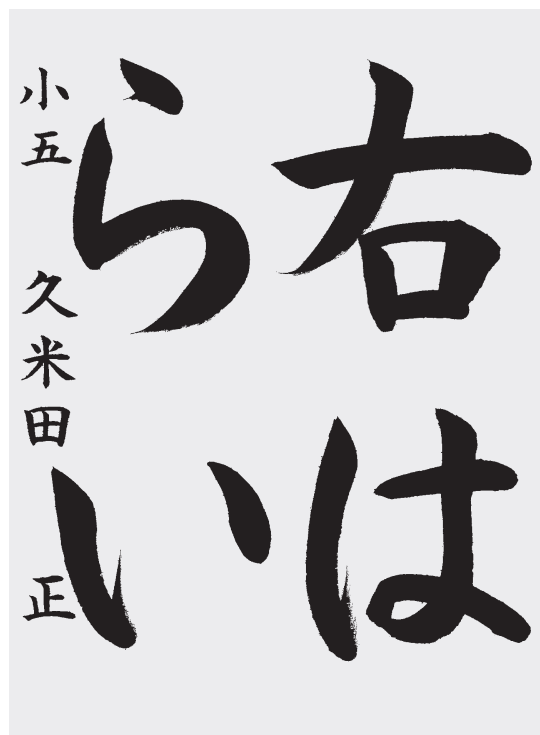
小学5年参考手本



北村白琉先生



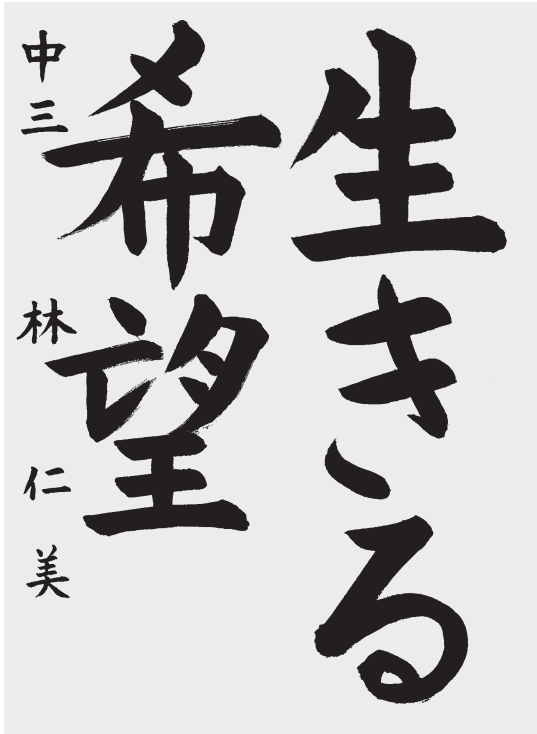
辻元大雲先生



大平邑峰先生

〔8月4日締切課題〕 作品に「学年」と自分の「氏名」を本人が書く。

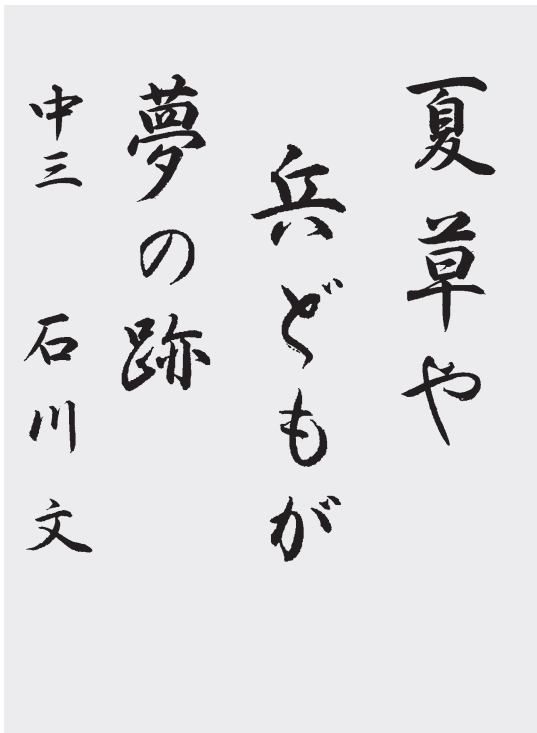
中学全学年参考手本（中学生は、どの課題を書いてもかまいません。）



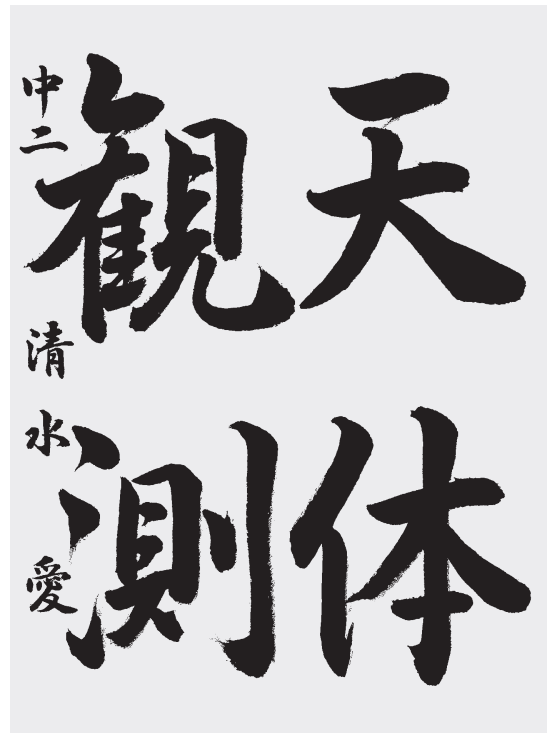
広瀬舟雲先生



三浦鄭街先生



小竹石雲先生



名越蒼竹先生

「松尾芭蕉の句」

毛筆参考手本解説(1)

活字と手書き文字の違いに気をつけて書きましよう。
ゴシック体(ゴ)・明朝体(明)・教科書体(教)・HGP行書体(H)

1年

め ひつじゅん
しめ ひげん
女女め ひげん
め(ゴ)め(明)め(教)

世 ちゅうしん 中心
み ひつじゅん
み ひつじゅん
み ひつじゅん

せみ(ゴ)
せみ(明)
せみ(教)
2年
世世せせ
美美みみ

ゆかた(ゴ) ゆかた(明) ゆかた(教)
か ひげん
か ひげん
か ひげん
か ひげん

さなぎ(ゴ) さなぎ(明) さなぎ(教)
さ ひげん
さ ひげん
さ ひげん
さ ひげん

3年

工 ちゅうしん 中心
作 おな 間か

「接し方」
四画めと五画め
の接する位置に
気をつける
作 4 5

工作(ゴ) 工作(明) 工作(教)

氷かき あける

氷かき ひつじゅん
氷かき(ゴ) 氷かき(明)
氷かき(教)

4年

月夜 中心
月夜 中心

「筆順」
月夜(ゴ) 月夜(明) 月夜(教)

花火 中心

「筆順」
花火(ゴ) 花火(明) 花火(教)

5年

登場 日は小さくして 左右をあける

「登」の字形

「筆順」
登場(ゴ) 登場(明) 登場(教)

「字源」
波波は
良良ら
以以い

「筆順」
右は(ゴ) 右は(明) 右は(教)

毛筆参考手本解説(2)

6年

中学

やさしい行書

中心 中心
スガ
玉ラ
最大幅にして上にそらす

〈筆順〉

一 丁 干 王 玉

ガラス玉(ゴ)

ガラス玉(明)

ガラス玉(教)

一度止めてからはらう

中心
達成

戈のそりを長くする

〈筆順〉

土 壺 幸 幸 達 達

ノ 厂 成 成 成 成

達成(ゴ) 達成(明) 達成(教)

神秘

ネ ↓ 禾
禾 ↓ 禾

〈筆順〉

ネ 禾 初 禾 初 神

、ソ 必 必 必

つながる気持ち

天 観
体 測

連続させて折り返す

〈筆順〉

一 二 天 天

イ 仁 竹 竹 休 休 体

ノ 禾 禾 雀 觀 觀

シ 泪 泪 測 測

生きる
希望
月はやや右に傾ける

最大幅で上にそらす

〈許容〉

巾の止め 払い
方向 折れ 払い

〈筆順〉

ノ 一 牛 牛 生

ノ 一 禾 禾 希 希

ノ 一 七 切 切 望 望

夏草や

兵どもが

夢の跡

「あしへん」の行書

足跡

行の整え方(配列)

● 行の中心に文字の中心をそろえる。

● 画数の少ない漢字や仮名は、やや小さめに書く。

● 字間・行間を、それぞれそろえる。

● 上下・左右の余白を適度に取る。

● 行頭の高さを工夫して書く

と、よりよい表現ができる。(行頭をそろえてもよい)

※編集余録(最終ページ)に

この句の現代語訳を載せました。

ひらがなの字源 (393)

「国語科書写の理論と実践」
全国大学書写書道教育学会編より転載

か	も	と	や	る	き	字源
加	毛	止	也	留	幾	字
か	も	と	や	る	き	形

※字源については、異字体から変遷したものに*印を付して()にその字体を記した。

※字形は古筆から抽出した。上段には字源に近い草仮名を配し、中・下段にはその変遷過程等を配した。

(例) 行頭を揃えて書く

夏草や

兵どもが

夢の跡

〔8月4日締切課題〕 作品に「学年」と自分の「氏名」を本人が書く。

中学生（行書）

中学生（楷書）

支 部 名	使つて髪 <small>（カミ）</small> の毛 <small>（モウ）</small> をと <small>（ト）</small> か <small>（カ）</small> し <small>（シ）</small> ま <small>（マ）</small> す。 し <small>（シ）</small> ま <small>（マ）</small> す。人 <small>（ヒト）</small> 間 <small>（マ）</small> も顔 <small>（カノ）</small> を洗 <small>（アラ）</small> い <small>（イ）</small> く <small>（ク）</small> し <small>（シ）</small> を す <small>（ス）</small> べ <small>（ベ）</small> て <small>（テ）</small> の <small>（ノ）</small> ホ <small>（ホ）</small> 乳 <small>（ニ）</small> 類 <small>（ルイ）</small> は毛 <small>（モウ）</small> づ <small>（ヅ）</small> く <small>（ク）</small> ろ <small>（ロ）</small> い <small>（イ）</small> を
段・級	
学 年	
名 前	
赤石晴美	

支 部 名	使つて髪 <small>（カミ）</small> の毛 <small>（モウ）</small> をと <small>（ト）</small> か <small>（カ）</small> し <small>（シ）</small> ま <small>（マ）</small> す。 し <small>（シ）</small> ま <small>（マ）</small> す。人 <small>（ヒト）</small> 間 <small>（マ）</small> も顔 <small>（カノ）</small> を洗 <small>（アラ）</small> い <small>（イ）</small> く <small>（ク）</small> し <small>（シ）</small> を す <small>（ス）</small> べ <small>（ベ）</small> て <small>（テ）</small> の <small>（ノ）</small> ホ <small>（ホ）</small> 乳 <small>（ニ）</small> 類 <small>（ルイ）</small> は毛 <small>（モウ）</small> づ <small>（ヅ）</small> く <small>（ク）</small> ろ <small>（ロ）</small> い <small>（イ）</small> を
段・級	
学 年	
名 前	
赤石晴美	

〈簡単な行書〉

洗 顔 手 門

↓ ↓ ↓ ↓

洗 顔 手 門

点画の省略

点画の連続

〈筆順〉

中心

髪

※長ノを入れないように注意

乳

中心

すべてのホ乳類は

行の中心がゆがまないように書きましよう。

し（シ）のたて画は長く引いてから曲がる
 右上に払い次画へ移行する

〈筆順〉

く（ク）ろ（ロ）い（イ）す（ス）ろ（ロ）い（イ）

乳（ニ）（明）乳（ニ）（教）

髪（カミ）（明）髪（カミ）（教）

書写を知り 学び楽しむ



広瀬舟雲先生

講師の広瀬舟雲先生は、武蔵野大学教育学部教育学科・教授、全国大学書写書道教育学会副理事長、(公財)書道芸術院評議員です。著書に「刻された書と石の記憶」、共著に「国語科書写の理論と実践」などがあります。

第89回 宮澤賢治の手書き文字（その2）

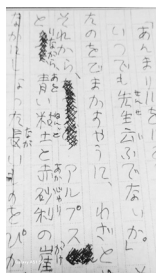
宮澤賢治は、郷里岩手県の花巻で農学校の教員として、また農業の研究者として尽力し、作家としては童話、短歌、詩、教材用絵図、絵画、短篇など実に多くの分野の作品を残した。また、賢治は、花巻市内の北上川西岸の一部に「イギリス海岸」と名付け、イギリスのドーバー海峡の白亜の海岸を連想させる泥岩層が川底に露出する場所があることを前回述べた。今年五月に実際に行ってみたが、この頃は雪深いみちのくの高い山々から雪が解け出す頃で、北上川に流れ込み、水量が多かったため川底の泥岩層は見る事ができなかった。イギリス海岸に流れ込む支流との合流点の岸壁に地層が露出し、白い粘土層なのか白亜の趣を呈していたのでこの近くに車をとめて川岸を散歩してみた。花巻市の案内によると、雪解けのころだけではなく、現在では北上川水系のダム整備により、水位が下がらなくなったという。そのため、川底を見ることが難しくなったとのことだ。これにより毎年賢治の命日である九月二十一日には関係各所の協力を得て、ここより上流にある五つのダムや猿ヶ石発電所にて水量を調整し、川の水位を下げる試みを行っているとのことである。この「イギリス海岸」と名付けられた北上川の西岸は、百万年ほど前の太古の時代には、海と陸との境界であった。つまり本当の海岸であった

のである。その地質図が、賢治記念館に掲示されていた。ここはかなり内陸であるが大昔、海岸であったとする証拠となる牡蠣の化石などがよく産出するという。賢治が生きていた時代には、農学校の生徒を連れてこの場所で、化石の発掘をよくしたとのことである。賢治の研究者として制作した教材用図版は実に緻密で、図版へ記入した手書き文字は、原稿用紙に書いた文字と区別していたように読みやすさを重視して明朝体を手書きしているのがあった。

次に賢治の代表作のひとつ「風の又三郎」の自筆原稿についてみたい。原稿用紙に書いただけあって、そのマスの中にしっかりと入れて書こうとしていることから字形が少し丸い感じがする。文字の消し方に特徴があり、線を上から左下、上から右下に何回も繰り返し交差させて見えなくなるまで、モミの木の枝ぶりを描くように消していくのだが、消し終わったものを見ると、毛羽立った青虫のようにも見えるところが面白いと感じた次第である。



◀ 賢治自筆教材図版



◀ 「風の又三郎」
自筆原稿（部分）

今月のホープ



中三 小宮 咲良 (土気書道教室)

紙面一杯に大らかに伸びのびと収めました。騒々しく感じないのは見事なほどのバランスと適格なリズムによるからでしょう。



小三 内島 絵梨 (しよこな?)

ダイナミックな縦線の迫力ある作。入終筆に心を配り最後まで集中力を絶やさず見事な作品を書きあげました。

支那名	射状	せん	パ
雅綾書院	にの	門を	リの
段・級	びて	中心	道路
学年	います	として	は、
氏名	岡	放	がい
	愛莉		

小六 岡 愛莉 (雅綾書院)

ペンを使用し、ひとつの失敗も許されないという緊張感の中で、伸び伸びと自分の線を堂々と書き切り、見事です。

支那名	付	結	ス
高根	近	び	ズ
段・級	しか	つき	メ
学年	住	が	は、
氏名	んで	強く	人間
	いない	家の	との
	咲人		

小五 宇佐見 咲人 (高根会)

よいリズムで書きすべての文字の字形、線質が見事、これを最後まで続けた集中力は目を見張りました。

春季昇段級試験最優秀作品



中三 高梨 安弥佳 (恵泉会)

柔らかい筆毛の弾力を存分に生かし、リズムにのって一気に書いた様子が窺えます。心豊かで味のある行書に惹かれました。



小六 大辻 結空 (春華)

名前共々、適格な筆使いで伸びやかさが魅力です。特に転折払いなど、筆先を大切にしつつ自然な動きで整え感動しました。

支部名	木の華会
段・級	
学 年	中三
氏 名	久保山 璃子

にかうりゴーセは淡色野菜に
 分類されるがビタミンやミネラルを
 良く含む。苦みが魅力。

中三 久保山 璃子 (木の華会)

字形が大変よく整い、線が強く堂々としています。生き生きとしたハツラツさが魅力的。日ごろの鍛錬が光っています。

支部名	
段・級	
学 年	六
氏 名	田中 菖蒲

ただ経験した事実だ
 けを書くのではなく、
 自分の考えも加えよう。

小六 田中 菖蒲 (龍水)

着実に筆画を正しく丁寧に整えて書いている点に感服。画間かくかんの白が美しく映え紙面全体に光彩を放っています。

幼・1年

よ
小一 たかだゆうり

うみ
小一 たなかかけい

2年

がえい
小二 たなかえみ

りみの
小二 白川カ

3年

星
小三 山田明子

まさ
小三 たなかはる

4年

秋風
小四 山広幸代

大海
小四 山田洋一

5年

満月
小五 上田友子

ポリス
小五 千田幸方

6年

防災
小六 武本陽仁

の敬老日
小六 坂下育

中学

交流
中一 佐藤陽子

不言
中二 白井真美

虫鳴
中二 武田洋子

おみな
中三 沢木ゆり

編集余録

○春季昇段級試験の最優秀作品と特待生に合格された方を紹介しました。また、審査長の下谷洋子先生より総評を頂きましたので、今後の学習の参考にして下さい。皆さんの益々の上達を願っています。

○7月10日より、第75回毎日書道展が開催されます。毎日書道展は、出品数約3万点の国内最大規模の公募展です。書道芸術院の先生方も多く出品していますので、是非足を運んでみて下さい。

○今月のお手本「夏草や兵どもが夢の跡」は、松尾芭蕉の「おくのほそ道」の一句です。松尾芭蕉は、江戸時代初期の俳人で、元禄二年（一六八九年）に弟子の曾良とともに、江戸（東京）から東北・北陸を経て大垣（岐阜県）に着くまで、約二四〇〇キロメートル、約一五日間の旅をしました。その旅の体験や各地の様子などを文章や俳句でまとめた紀行文が「おくのほそ道」です。

「夏草や兵どもが夢の跡」は、芭蕉が岩手県の平泉町に訪れた時に詠んだ句です。平泉は平安時代に奥州藤原氏が治めていましたが、源頼朝から逃げる源義経をかくまったことを発端に、源頼朝によって滅ぼされてしまいました。この句の現代語訳は、「今や夏草が生い茂るばかりだが、ここはかつて武士たちが栄誉を求めて戦った跡地である。昔のことはひと時の夢となってしまった」という意味で、自然の雄大さと人の世の儚さを思い詠んだとされています。
(悠輝)